

4-2

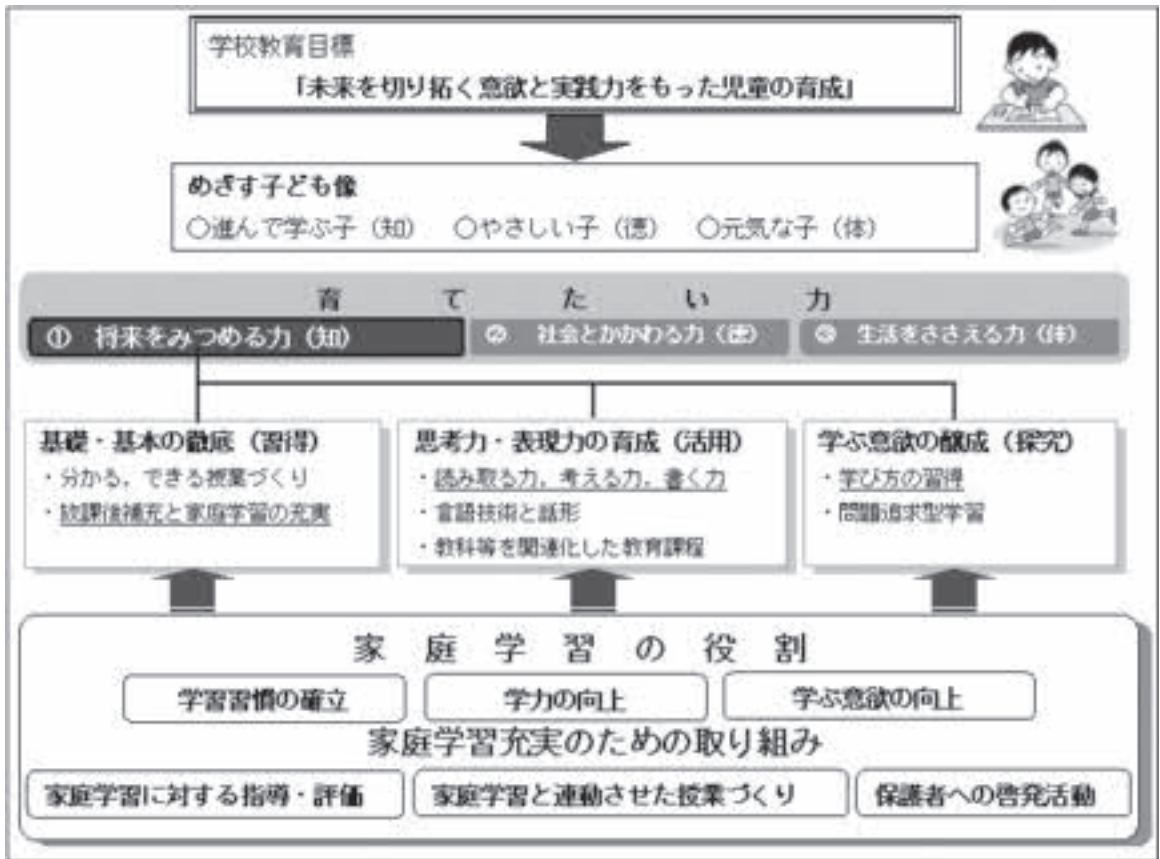
思考力・表現力の育成を目指した 家庭学習の工夫と授業改善

広島県三次市立三和小学校教諭 愛甲 昌弘

1 家庭学習充実を実現するための学校としての基本方針・方略

1 本校の学力向上のビジョンにおける家庭学習充実の位置づけ

図表4-2-1 学校教育における家庭学習の位置づけ



図表4-2-1は、本校の学校教育における家庭学習の位置づけを構造図で示したものである。

本校では「未来を切り拓く意欲と実践力をもった児童の育成」を学校教育目標に掲げ、進んで学ぶ子、やさしい子、元気な子を育成することを目指し、教育活動を行っている。

学力を「将来を見つめる力」と捉え、①基礎・基本の徹底 ②思考力・表現力の育成 ③学ぶ意欲の醸成、の3つの観点から指導を行っている。

これらの力を育てる上で、家庭学習は大きな役割を持っていると考えている。それは、家庭学習に毎日しっかりと取り組ませることにより、学習習慣を身に付けさせるとともに、基礎的・基本的な知識・技能、論理的な思考力・表現力といった学力の向上、さらには学ぶ意欲や自己教育力の育成にもつながるからである。

このように重要な役割を担う家庭学習をさらに充実させるために、家庭学習に対する指導・評価、

家庭学習と連動させた授業づくり、家庭学習の重要性や意義を保護者に啓発することを主な手立てとして取り組んでいる。

2 学校研究における家庭学習の位置づけ

①研究主題

「論理的に考え表現する力を育てる授業の創造」
 ～ICTを活用した算数科・国語科の授業改善を通して～

②研究構想

本校では「論理的に考え表現する力を育てる授業の創造」を研究主題に掲げ、ICTを活用した算数科・国語科の授業改善を通して論理的思考力・表現力の育成に取り組んでいる。

図表4-2-2は、研究で育てたい力の構造図である。思考力を育成するためには、思考を表現させ、その内容や過程を評価・指導することが必要である。また、論理的表現方法を学ぶことで論理的思考力を身に付けることもできる。このように思考力と表現力は互いに補完しながら向上すると捉えている。さらに「ことばの力」「論理的に思考・表現しようとする態度」「学びの基礎力」「基礎的・基本的な知識・技能」といった力を論理的思考力・表現力の基盤となる力と捉えている。

このような力を育てるために「思考力・表現力を育成するための授業づくり」「研究の評価・改善サイクルの確立」「校内研修の工夫による研究の共有化・活性化」の3点を研究の柱とした。

その中心となるのが「思考力・表現力を育成す

るための授業づくり」である(図表4-2-3)。

考え、表現し、伝え合うことを単元構成や授業づくりの基盤として、

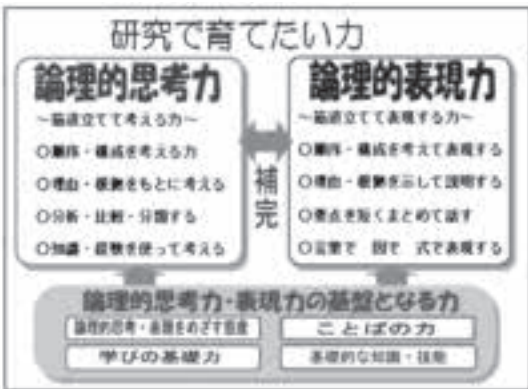
- ①それぞれの場面においてICTを効果的に活用する
- ②思考・表現を引き出す学習活動・単元構成を工夫する
- ③ことばの学習との関連を図る
- ④個に応じた指導の工夫をする

を授業改善の視点に掲げ取り組んでいる。

家庭学習については、次のようなねらいをもって指導している。

- 思考・表現の基盤となる基礎的・基本的な知識・技能を習得させること
- 応用発展的な課題によって思考力を育成すること
- スピーチ練習、文の推敲等によって論理的表現力を育成すること
- 学習したことを生活と結び付けて考える力を育成すること

図表4-2-2 研究で育てたい力



図表4-2-3 研究構想図



2 家庭学習充実を目指した具体的取り組み

1 家庭・保護者への啓発活動

① PTA総会の開催（4月）

毎年4月に行うPTA総会では、校長が学校の教育目標、教育方針について説明を行っている。その中で、家庭の役割を

- 1 温かい愛情（居場所）
- 2 よりよい生き方
- 3 しつけ
- 4 基本的生活習慣
- 5 家庭学習

の場と位置づけ、自立に向けた基盤を育てる上で、家庭と学校がそれぞれの役割を果たし、連携していくことが重要であることを説明した（図表4-2-4）。

② 地域懇談会の開催（7月・1月）

7月と1月には、校区内の4地域ごとに懇談会を開いている。学校からは、児童実態（データ）や学校での取り組み、家庭に協力してもらいたい事項を、学力・生活の両面から紹介している。

家庭学習については、全学年で目標としている「学年×10分+10分」を、どの程度達成できているのかをデータで示した。その上で、毎日落ち着いて家庭学習に取り組めるように、学習をする時間や場所を決めることや、テレビを消すことなど、家庭に協力を要請した。また、文部科学省の全国学力調査の結果から、学習習慣や学習意欲とテストの得点のグラフを提示し、学習習慣の定着が学力向上にも影響していることを説明した（図表4-2-5）。

図表4-2-4 PTA総会資料



図表4-2-5 地域懇談会資料

2 家庭学習に対する指導・評価

①家庭学習のガイダンス

▶三和っ子学習の手引き

年度当初に、「三和っ子学びのすすめ」というプリントを児童に配布している(図表4-2-6)。

これは、先進校が作成した学習ガイダンスをもとに、本校の実態に合わせ改良したものである。プリントには、家庭学習に取り組む意義や方法が詳細に書かれている。

自主学習の習慣がなかなか定着しない児童の中には、自主学習で何をどうすればよいかわからないという思いを持っている児童も多い。そういった児童には、プリントで紹介されている事例の中から選んで学習してくるよう指導できる。

図表4-2-6 三和っ子学びのすすめ



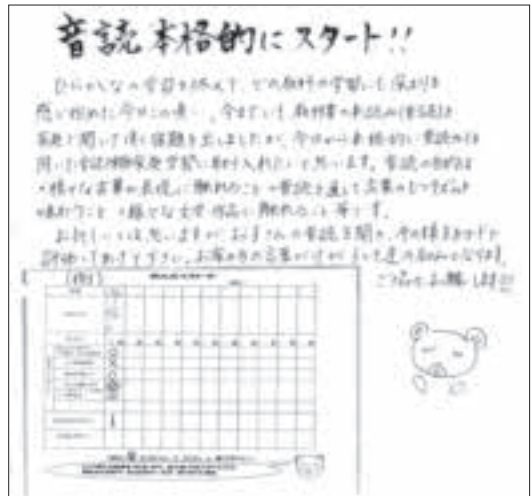
▶学級通信の工夫

保護者に音読やリコーダーの演奏を聞いてもらい、サインをもらうという宿題を出すことも多いが、教師側の意図と保護者の評価の観点や基準が違ってしまいうこともある。

そこで、学級通信に家庭学習の内容やねらい、評価の観点などを掲載し、家庭学習の一層の充実を図る取り組みも行っている。図表4-2-7は、1年生の学級通信である。音読カードの利用をはじめにあって、「様々な言葉や表現に触れること」「音読を通して言葉の持つリズムを味わうこと」など、音読をする意味を説明したり、児童

のがんばりを励ましてほしいという願いを書いたことで、保護者の理解と協力が得られるようにしている。

図表4-2-7 学級通信



②家庭学習の点検・評価と指導

宿題は原則としてその日のうちに採点し、その日のうちに直しをするようにしている。つまづきをなるべく早く把握し指導することで、基礎・基本の確実な定着をめざしている。

算数の宿題は、TT教員が採点し、チェック表に間違いの個数を記録する。担任はチェック表を見て、間違いのあった児童に直しをさせる。

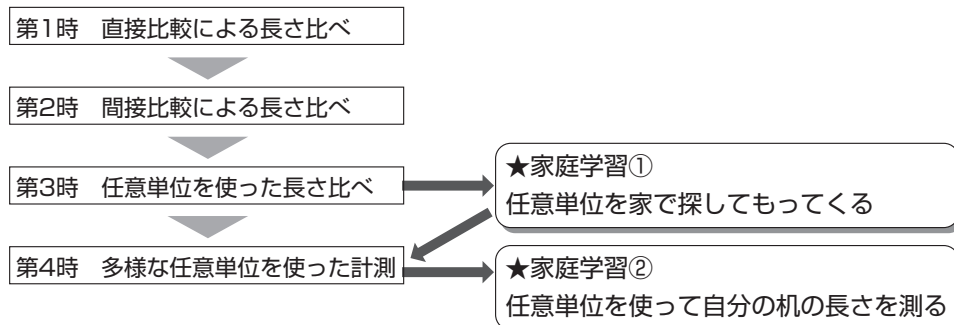
放課後には毎日、算数の補習を図書室で行っている。TT教員や校長が指導を行っている。取り組みを始めて3年ほどたつが、児童にも定着し、静かな雰囲気の中で学習に取り組む姿が見られる。



3 家庭学習と授業を連動させた実践

< 1年算数科「ながさくらべ」 >

▶ 単元の流れと家庭学習の位置づけ



図表4-2-8 「ながさくらべ」単元の流れ

▶ 概要

第3時で、長さ比べゲームを通して任意単位を使った長さ比べを学習した。学習後に、次の時間に自分が使おうとする任意単位のもの(道具)を、家で探してもってくるようにした(家庭学習①(図表4-2-9))。

児童は家からニンジン、なわとび、洗濯ばさみ、しゃもじなど、実に多彩な道具を持ってきた。

自分が見つめてきた道具を使うことで、学習に対する興味・関心・意欲を高めることができた。

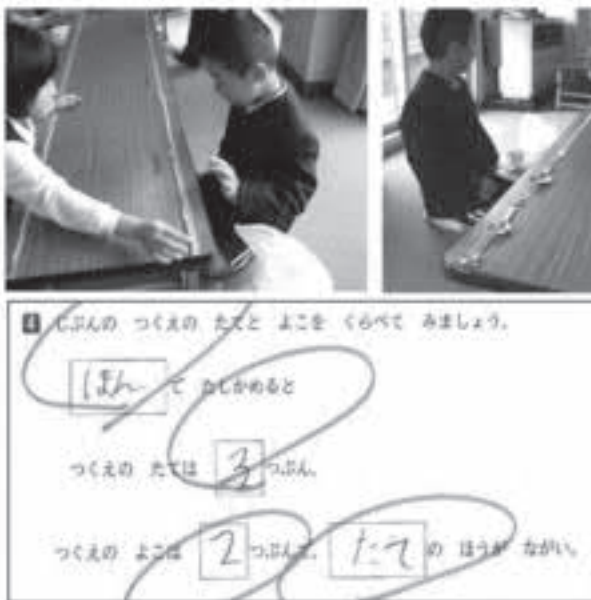
また、それぞれがいろいろな道具を使って計測することで、長いものや曲がっているものを測るのに便利な道具に気付いたり、道具が1つしかなくても、印をつけながら何個分あるかを数えれば計測できることに気付くなど、学習がより豊かなものになった。

第4時終了後、家庭学習②のプリントを提出させ、任意単位を使った計測方法や表現方法が個々の児童に定着しているかを把握した(図表4-2-10)。

図表4-2-9 「ながさくらべ」家庭学習①

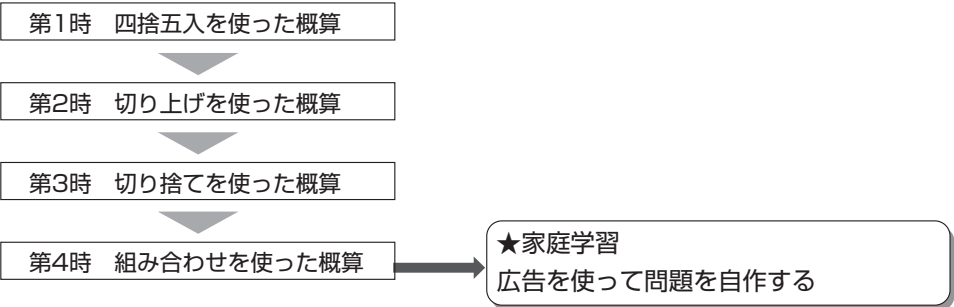


図表4-2-10 「ながさくらべ」家庭学習②



＜5年算数科「計算の見積もり」＞

▶単元の流れと家庭学習の位置づけ



図表4-2-11 「計算の見積もり」単元の流れ

▶概要

本単元は和と差の計算の見積もりの学習である。目的や場面に依じて見積もりの仕方を選択できる力を身に付けさせることを単元の目標とした。

単元の学習が終わった後、家にある広告チラシから好きな商品を切り抜き、それを使った計算の見積もりの問題を自作する家庭学習を出題した。問題の下には、解答(式・答え・考え方)を書かせた。

図表4-2-12 「計算の見積もり」家庭学習



問題作りは、習った知識や考え方を活用して考える力を育てる上で有効であるが、算数の苦手な児童にとっては難しい課題である。そこで、教師が問題例を作成・配布し、どのように問題を作ればよいのかを事前に説明しておいた。

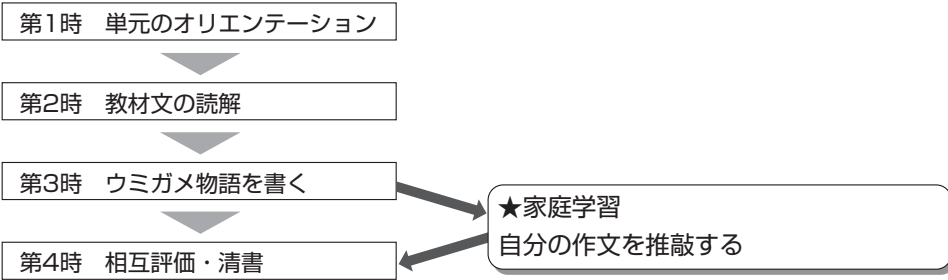
図表4-2-12は、実際に児童が家庭学習で取り組んだプリントである。選んだ商品の値段にあった問題文を考えなければならないが、ほとんどの児童が適切に問題を作成していた。これは、問題の解答や考え方の説明を書く欄を設けたため、自分の作った問題が適切かどうか判断できたからではないかと考える。

「計算の見積もり」は、生活と結び付けやすい学習のはずだが、見積もりのよさをなかなか感じられず、活用する意味が捉えにくい児童も多い。

家にある広告チラシを使った家庭学習をすることで、「計算の見積もり」が自分たちの生活に身近な学習であるという感覚を持たせることができた。

< 4年国語科「ウミガメのはまを守る」 >

▶ 単元の流れと家庭学習の位置づけ



図表4-2-13 「ウミガメのはまを守る」単元の流れ

▶ 概要

第3時は、第2時までの学習で読み取った保護活動について、「ウミガメ」の視点に立って捉えなおし、「ウミガメ物語」と題した物語文を書く学習である。文章の構成を「書き出し」「2つの保護活動」「ウミガメの願い」という3部構成にするなど、教材文の読解を生かすようにした。

図表4-2-14 「ウミガメ物語」の書き方

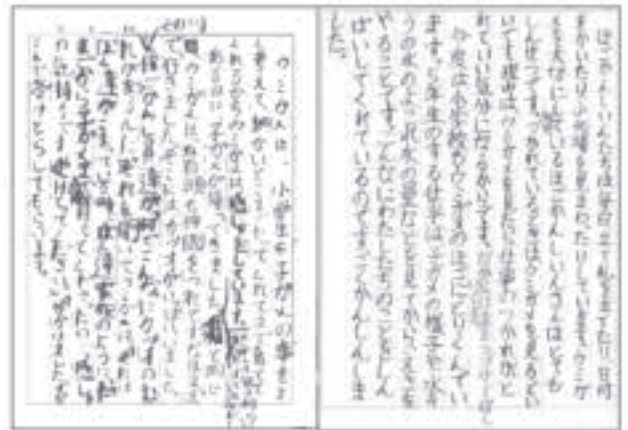


授業で「ウミガメ物語」の書き方(図表4-2-14)を活用し作文を書き上げた後、家庭学習で自分の作文を推敲する課題を出題した。図表4-2-15は児童が実際に推敲してきた作文である。ウミガメの視点で書けていない部分や、文のねじれを見つけ、訂正している。

第4時では、さらに友だちと作文を交換し、相互評価を行った。

作文を書くときや推敲するときには、作文チェック表(図表4-2-16)を使った。これにより書く際のポイント、注意点を意識しながらすすめることができ、効果的であった。

図表4-2-15 「ウミガメ物語」の推敲

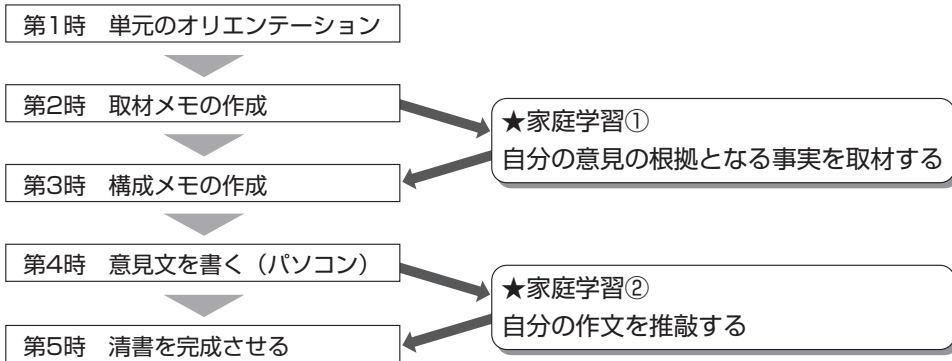


図表4-2-16 作文チェック表

作文チェック表	
①作文の始まりは1字下げた。	()
②習った漢字を正しく使った。	()
③数字は漢字で書いた。	()
④、や。を使った。	()
⑤同じ言葉を何度も使わない。	()
⑥話のまとまりで段落を変えた。	()

<6年国語科「わたしの意見を書こう」>

▶単元の流れと家庭学習の位置づけ



図表4-2-17 「わたしの意見を書こう」単元の流れ

▶概要

本単元は、自分たちの生活の中の「言葉の使い方の問題点」について、事実をもとに自分の意見を作文にする学習である。

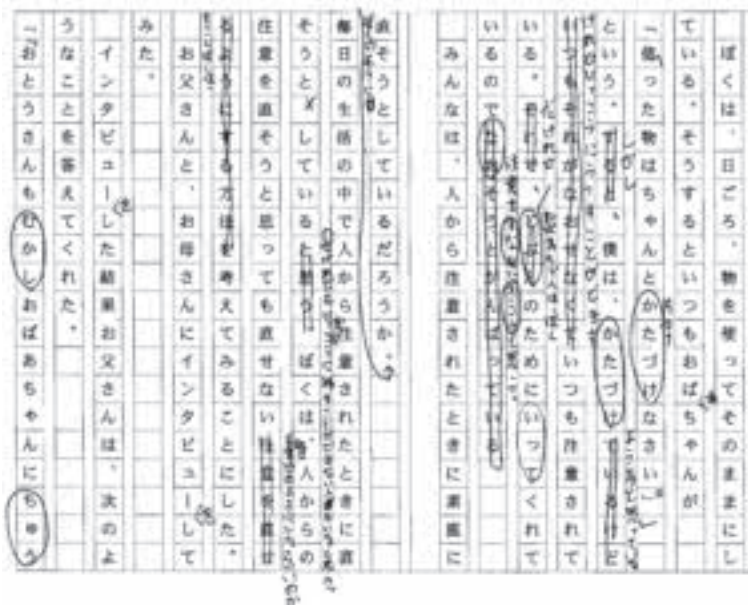
教科書の例文を分析し、相手を説得するためには「意見の根拠となる事実を挙げる」「文章構成を工夫する」「考えと事実を区別する」といった工夫が必要であることを学んだ。

自分の意見の根拠となる事実を得るために、教科書の例文では、友達へのアンケートや家族へのインタビューを行っている。しかし、授業時間だけでは十分な取材ができないため、家庭学習の課題にした(家庭学習①)。

児童は、放課後や帰宅後の時間を使って「方言で話していて困ったことは無かったか」「略語を話しているのを聞いて意味がわからず困ったこと

が無かったか」といった取材を、友達や家族に行い、自分の意見の根拠を得ることができた。

今回はパソコンを使って作文を書いた。パソコンで文章を作成すると、書き直しや消去が楽にでき、作文の苦手な児童も意欲的に学習できる。しかし、文章全体の流れを読んだり、細かい表現を見直したりするためには、紙の方がやりやすい面がある。そこで一度完成した作文を印刷し、自分で推敲する課題を出題した(家庭学習②)。印刷前に一度自分の作文を読み直していたが、家でじっくりと推敲することでかなり訂正箇所が見つかった(図表4-2-18)。



図表4-2-18 児童が推敲した作文

< 5年国語科「敬語を適切に使おう」 >

▶ 単元の概要

第1時 敬語の種類と使い方

第2時 敬語を使おう

★家庭学習

自分の意見の根拠となる事実を取材する

図表4-2-19 「敬語を適切に使おう」単元の流れ

▶ 概要

敬語の学習では、敬語の種類を覚えたり、文章を敬語に書き直したりする学習が多いが、実際に敬語を使って話す活動が十分ではない。

そこで家の人に敬語で話をして、できているかどうかを評価してもらうワークシートを作成し、家庭学習の課題とした(図表4-2-20)。保護者を「家に來られたお客さん」と仮定して、4つの文章を適切な敬語に直して話しかけるという課題である。

ワークシートには保護者向けに簡単な説明を添え、最後に一言感想コメントを書いてもらう欄を

設けた。

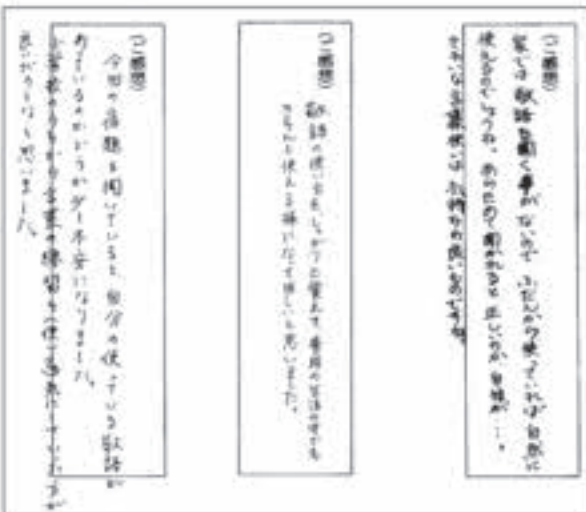
保護者からは

「普段使っていないので、もっと使うようにしたい」「自分自身も敬語の使い方があやしくなっているので、勉強になった」などの感想を得た(図表4-2-21)。提出された全てのプリントに保護者のコメントが書かれており、高い関心を持って児童とともに宿題に取り組んでもらえたことがわかった。

敬語は普段から使っていないとなかなか身に付かない。家庭学習を活用し、敬語を日常的に使うことの大切さを保護者に意識してもらえたことは、成果であった。



図表4-2-20 「敬語を適切に使おう」家庭学習



図表4-2-21 保護者からの感想

3 成果と課題・今後の展望

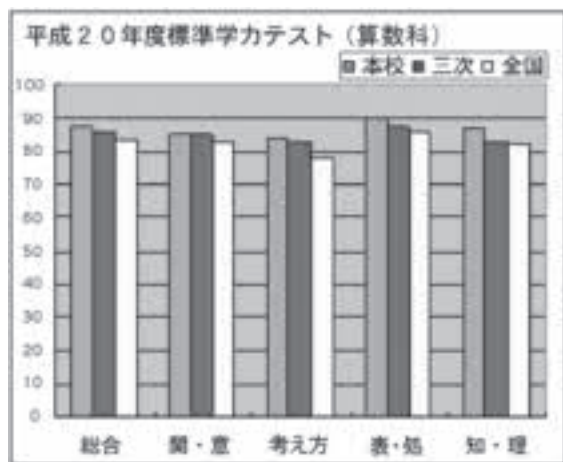
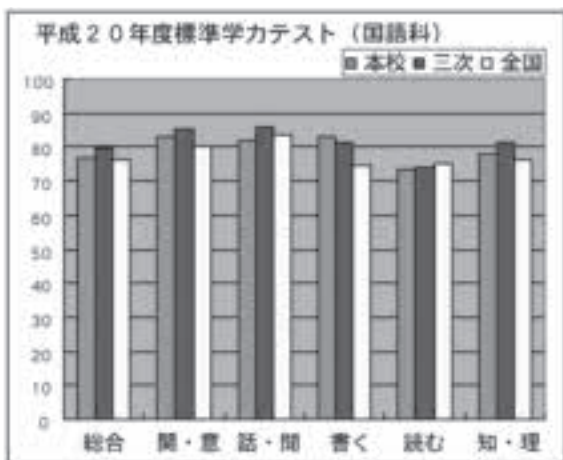
1 学力調査の結果から

図表4-2-22は、三次市が実施した平成20年度標準学力テストの5年生の結果である。

本校は、算数科では全観点で市、全国平均を上回っている。特に表現・処理、知識・理解、考え方の観点では平均を大きく上回る結果となった。家庭学習でつまずきを見つけ、指導を行ってきた効果が現れていると考える。

国語科では全国平均は概ね上回っているものの、市平均を下回っている観点も多い。書く力は市・全国平均を上回っており、授業改善や家庭学習の工夫の効果が現れていると考えられる。読み取りの力を向上させることが大きな課題として挙げられる。

図表4-2-22
平成20年度標準学力テスト(国語科・算数科)



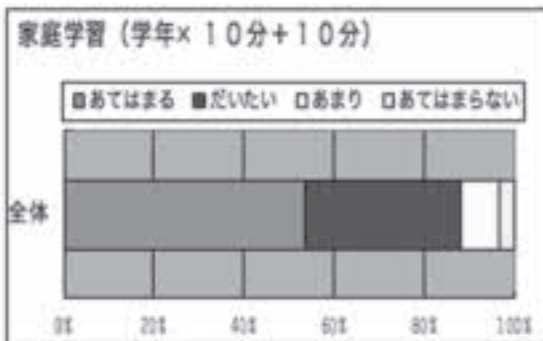
2 家庭学習時間の調査結果から

図表4-2-23は、本校で毎学期実施している児童実態調査の家庭学習の時間に関するデータである。

家庭学習を「学年×10分+10分」取り組んでいると答えた児童は「あてはまる」「だいたいあてはまる」合わせて9割近くにのぼり、家庭学習の習慣は概ね定着しているといえる。

ただ、宿題をしているときにテレビがついていたり、夜遅くなってから取り掛かっていたりする児童も多い。時間だけでなく、内容や取り組み方についても継続的な指導が必要である。

図表4-2-23 児童実態調査(家庭学習の時間)



3 今後の展望

応用発展的な課題や、学習を生活に結び付けるような課題など、家庭学習にもバリエーションがでてきた。しかし量的に見ると、計算・漢字ドリル、復習プリントなど、反復学習が多い。家庭学習が基礎的・基本的な知識・技能の定着にとって大きな意味を持っていることは勿論である。しかし、家庭学習が思考力・判断力、コミュニケーション力、情報活用能力といった学力の向上や、自己充実感、学習の有用感といった学ぶ意欲の向上、そして学習マネジメント力や自己教育力といった学び方の獲得など、多くの効果をもたらす学習であるという意識は、まだ低い。指導者が明確な意図を持ち、手立てを講じることが重要である。そのためには、学校全体でもう一度家庭学習の意義、ねらいを確認し、多様な課題にバランスよく取り組ませる必要がある。

また、保護者に対しても積極的に情報提供をしたり、協力を仰いだりしながら、家庭学習の充実を目指し、学校と保護者の連携を更に強める取組みを進めていきたい。